

透析外来に通院している前期高齢者のセルフケアの実践

キーワード：前期高齢者、セルフケア、透析、外来通院

○山際和子¹⁾、倉井佳子²⁾、金子史代²⁾、 広瀬ひろみ³⁾、佐藤益美³⁾
県立新発田病院附属看護専門学校¹⁾、新潟青陵大学看護学科²⁾、 新潟臨港総合病院³⁾

I. 目的

慢性疾患をもち透析外来に通院をしている前期高齢者のセルフケアは、病気と付き合いながら、自分らしく生きようとする生活者としての努力であり、それは住み慣れた家と地域、身近な人々、医療者の支援によって維持される。透析療法は延命手段としての概念から生活手段としての概念に変わりつつあり、高齢者に対する治療法として変化しつつある。本研究では、透析外来に通院している前期高齢者のセルフケアの特徴を明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 期間：平成 21 年 3 月から平成 22 年 8 月。
2. 対象者：A 総合病院に外来通院をしている前期高齢者（68 歳から 71 歳）の慢性腎不全（透析療法）患者で、身体症状が安定しており、自分の生活内容について客観的に語れることを条件とした。
3. 方法：前期高齢者への半構造化面接法による聞き取り調査で得られたデータを KJ 法を用いて分析した。質問項目は、透析外来に通院している前期高齢者が生活において自分で考え工夫していること、家庭や身近な人との関係、自分を支えていること等である。面接は 1 名に 1 回実施して、静かでプライバシーが保持できる環境で会話する方法で行った。面接時間は 30 分前後を目標とし、面接内容は対象者の許可を得てその場で記録しそれを逐語記録にしてデータとした。データは研究者全員で確認しながらその内容を 1 つの意味のまとまりのある文として取り出してラベルを作成し、それらの意味内容の類似性によりグループ化した。
4. 倫理的配慮：本研究は看護部の承認を得て行った。対象の選定は施設に依頼し対象者の同意を得てから紹介してもらった。研究者から対象者に文章と口頭で目標・方法・参加の自由と拒否権、参加及び不参加により不利益は生じないこと、逐語録の作成と結果の発表、個人情報保護等を説明し同意書をもって同意を得た。

III. 結果

対象患者 5 名は男性 2 名、女性 3 名、平均年齢は 68.8 (±2.2) 歳であった。ラベル数は 170 であった。

これらのラベルを共通する意味内容ごとに 4 回のグループ編成を繰り返した結果 4 つの大グループ「自分の判断で決める」「気力と誇り」「主体的に社会と関わる」「家族と身近な人の支援」に分類された。これらの中で前期高齢者のセルフケアの実践を表すラベルに着目してその内容を抽出した。その内容は「自己決定」「生きる張り合い」「主体性」などの内面的な要因と「夫」「娘」「友人」「医療者」などの生活を支える人的資源のラベルに分類することができた。「自己決定」のラベルの中には「病状の自己管理」についてが半数を占めていた。前期高齢者のセルフケアは、生活者としての努力である内面的な要因と生活を支える人的資源の比重では内面的要因が大きい。気力や体力的にはまだ余力がある状況であり、自分自身の生活と透析の両立ができている。まず、自分で考え実行して、次に不足なところを他者から支援を受けている。仕事は引退していても、引き続き地域の役員やボランティアでの役割があり、趣味を持ち交友関係を築き自分の社会を広げる余裕がある。

IV. 考察

今回の透析外来に通院している前期高齢者は、生命維持のための正確なセルフケアへの関心が高く、さらに通院時に医師、看護師、他の患者と接し、自分の病状を把握することができるため、正確なセルフケアを維持していると考えた。これらは、生活者としてまだ余裕がある状態であり日常生活と透析通院の両立ができているからである。

V. 結論

前期高齢者は、自分自身の時間的・体力的余裕があり生活者としての努力である内面的な要因と生活を支える人的資源の比重では内面的要因が大きく、自分自身の生活と透析治療の両立ができている。

透析治療を受けながらのセルフケアの実践は、生命維持の厳しい現実もあるが、内面的要因としてのセルフケアへの関心と医療者など治療を支える人的資源の関係を保つことで、その人らしい療養行動がとられている。